

哲学歴史学科

哲学コース

フィクションのパラドックス

文学部

2021年度

A18LA072

さかもとりょうたろう

阪本 涼 太郎

# 目次

---

序論

## 1 思考説 VS. ごっこ説

1.1 思考説

1.2 ごっこ説

## 2 論点の整理

## 3 思考説の穴を埋める

3.1 思考説の問題点

3.2 情動理論の諸説概観

3.3 感情評価説

3.4 感情評価説によるパラドックスの解決

結論

文献表

## 序論

あなたはフィクション作品<sup>1</sup>がお好きだろうか。SF小説、古典ミュージカル、韓流ドラマ、鬼退治系アニメ……挙げればきりが無いほどに、この世界にはフィクション作品が溢れている。仮にあなたが生粋のフィクション嫌いであったとしても、現代におけるフィクションの凄まじい隆盛を否定することはできないだろう。もちろん、フィクションというのは現代の発明ではない。遙か昔より存在し、極めて多くの人間の関心を惹き、彼らの人生を彩ってきた。通時的にも共時的にも、フィクションは私たちの世界の大きな、そして欠かせない一部なのである<sup>2</sup>。

そんなフィクションに魅せられた人間のひとり、コリン・ラドフォードは1975年に次のような問いを発した。“私たちは如何にしてアンナ・カレニナの運命に感動することができるのか？（How can we be moved by the fate of Anna Karenina？）”。彼は結局、フィクションに情動を抱くことは人間の不合理な反応の例であると結論付けたのだが、この問いは多くの議論を経て今では“フィクションのパラドックス”として知られるようになった。一般に、フィクションのパラドックスは、一見したところどれも否定しがたい次の3つのテーゼの不整合から生じるとされる<sup>3</sup>。

(1.真正情動条件)：ある対象に対して真正の (genuine) <sup>4</sup>情動を抱くためには、われわれはその対象が存在する<sup>5</sup>と信じていなければならない。<sup>6</sup>

---

<sup>1</sup> 以後「フィクション fiction」という語は、芸術作品（人工物）のジャンルにおけるノンフィクションの対立概念としての意味で用いる。

<sup>2</sup> なぜフィクションが私たちの世界で大きな位置を占めているのか、フィクションが存在しない社会はあり得るのか、という問いは別で考えるべき非常に重要な問いだろう。

<sup>3</sup> 3つのテーゼの各呼称は Gendler and Kovakovich [2005]を元に私が手を加えたものである。

<sup>4</sup> 「真正の情動」とは、ありふれた日常的な情動と同等に「情動」という名に値するものという意味である。

<sup>5</sup> ここでいう「存在 existence」は、物理的存在者という意味で解すべきだろう。

<sup>6</sup> この真正情動条件が突飛なものに見えるかもしれない。この条件の表現は論者によって異なるが、ここで言わんとされていることは、「情動には、対象が私（または世界）に対してどのような影響を及ぼすかということについての認知または評価が不可欠であって、そのような認知や評価は対象の存在が信じられていることを要求する」ということである。たとえば、登山者が目の前の熊を恐れる(fear)とき、彼は熊が自分に危険をもたらす

(2.不信条件) : われわれはフィクションの中で描かれている対象が存在するとは信じていない。

(3.反応条件) : われわれはフィクションの中で描かれている対象に対して、真正の情動を抱く。

このパラドックスを解決するためには、3つのテーゼのうちの少なくともひとつを否定する必要がある。これまで、形而上学や認識論、さらには心の哲学等の広範な分野から様々なアプローチが試みられてきたが、未だ完全な決着はついていない。

そこで本論文では、最も有力な立場のひとつである思考説 (thought theory) に注目し、この立場の問題と可能性を検討したい。思考説は一定の支持を得ているのだが、なお完全な理論には至っていない。私の考えるところ、その大きな要因は、これまで思考説を含むフィクションのパラドックスをめぐる議論において情動の哲学の分野への反省があまりに為されてこなかったからである。ゆえに本論文では、ジェネファー・ロビンソンが提唱する感情評価説 (affective appraisal theory) という情動理論を参照し、この理論が思考説の理論的な問題を解決しうることを示す。

先に、思考説が一定の支持を得ていると述べたが、もうひとつ一考に値する興味深い立場が存在する。それはごっこ説 (make-believe theory) と呼ばれる立場である。もちろん、フィクションのパラドックスに関する見解は思考説とごっこ説のみではないが、近年の議論の動向を見る限りこれらが主要な説であることは明らかであるので、本論文では思考説とごっこ説に焦点を絞って議論の手引きとしたい。

各章の展開は以下の通りである。第1章では、思考説とごっこ説のそれぞれの主張を明らかにする。続く第2章では、両者の論点を整理する。第3章では、まず思考説の問題点を指摘する。その後、パラドックスの解決方法として思考説とごっこ説の2つを検討し、感情評価説の主張と思考説の主張の一致を示すことで、感情評価説が思考説の問題をクリアしうることを示す。

---

と考えている (危険を認知・評価している)。この場合、彼によって熊の存在が信じられていないのであれば彼の恐怖は真正のものではない、ということがこの条件の主張である。

# 1 思考説 VS. ごっこ説

## 1.1 思考説

第一章では、本論文の議論の基本線となる思考説とごっこ説について、それぞれの主張と対立点を示す。各立場を検討する前に、フィクションのパラドックスがどのようなものであるかをもう一度確認しておくのがよいだろう。

(1.真正情動条件) : ある対象に対して真正の (genuine) 情動を抱くためには、われわれはその対象が存在すると信じていなければならない。

(2.不信条件) : われわれはフィクションの中で描かれている対象が存在するとは信じていない。

(3.反応条件) : われわれはフィクションの中で描かれている対象に対して、真正の情動を抱く。

以上の3つのテーゼはすべてが同時に真となることはできない。ゆえに論理的整合性を保つためには3つのテーゼの内の少なくとも1つを否定しなければならない。では、どのテーゼをどのようにして否定すべきか。これがフィクションのパラドックスの問題である。

まずは思考説がどのようにしてこの問題に立ち向かうのかを見てゆこう。思考説はフィクションのパラドックスにおける立場のひとつであり、現在ますます多くの支持を集めている。思考説の主な論者にはピーター・ラマルク[Lamarque 1981]やノエル・キャロル[Carroll 1990]などがいる。思考説の主張はこうである。「真正の情動が生じるためには、情動の対象が存在しているという信念が抱かれている必要はなく、思考が生じていればよい。ゆえにパラドックスにおける(1.真正情動条件)が否定されるべきである」と。思考説の一般的な主張をより詳しく示そう。

まず、思考説の言う「思考」とは何であろうか。本論文の議論においてもっとも重要な点は、「思考 (thought) 」<sup>7</sup>が「信念 (belief) 」とは異なるということである。信念とは、その信じられている内容の真偽に関わる心的態度である。たとえば、「地球が平面である」と信じるということは、すなわち「地球が平面である」ということを真と見なすことである。逆に、「地球が平面でない」と信じるということは、すなわち「地球が平面で

---

<sup>7</sup> ラマルクは思考 *thought* を心的表象 *mental representation* とも言い換えている。[Lamarque 1981], p.296。ゆえに思考という語を「心に思い浮かべられたこと」というような広い意味で解すべきだろう。

ある」ということを偽と見なすことである。つまり、信念の主体は常にその内容の真理性にコミットするのだ。一方、思考とは、なんらかの内容を心に思い浮かべることである。単に心に思い浮かべるだけであるから、信念と違って思考の場合、主体はその内容の真理性にコミットしない。「地球が平面である」と思考するということは、平面的な地球をただ思い浮かべることであって、「地球が平面である」ということを真と見なすことではない<sup>8</sup>。思考と信念が異なるものであるがゆえに、地球が球体であることを信じている（知っている）人間であっても、平面的な地球を思考することができるのである。この点に関して思考説論者のノエル・キャロルは次のように言う。

ここで言う思考とは、信念との対比を意図された用語である。信念を抱くとは、命題を主張として(assertively)抱くことであり、思考を抱くとは、命題を主張ではないものとして(nonassertively)抱くことである。思考と信念はどちらも命題的内容を持っている。しかし、思考においてはその内容が事実であるかどうかコミットすることなしに抱かれるのに対し、信念を抱くことはその命題の真理性にコミットすることである。<sup>9</sup>

このように、思考と信念は内容の真理性への関与という点で区別される。思考説は、この区別をもとにパラドックスを解決しようとする。結論から述べれば、信念無しに思考の内容のみが情動の原因になりうるということを根拠に、「ある対象に対して真正の (genuine) 情動を抱くためには、われわれはその対象が存在すると信じていなければならぬ」という (1.真正情動条件) を、「ある対象に対して真正の (genuine) 情動を抱くためには、われわれはその対象が存在すると信じていなくともよい」として否定するのである。思考説によるパラドックスの解決はほぼこの論点に集約されるのだが、念のためもう少し「思考」の本性について示しておこう。

そもそも「思考」という語は二義的である。ひとつには作用または命題的態度として、すなわち「思考すること (thinking) 」としての意味がある。もうひとつには内容として、すなわち「思考されたこと (thought) 」としての意味がある。日本語ではどちらも「思考」という語で表現されるのだが、ここで思考説が言う「思考」は後者の意味、すなわち

---

<sup>8</sup> 地球が平面であると思える場合、平面的な地球を視覚的に“イメージ”するのが普通だろうが、思考することに必ず何らかのイメージが伴うというわけではない。たとえば、「数学的な点」は思考の対象になりうるがイメージの対象にはなりえない。この意味で思考とイメージは区別される。ただ、フィクション経験の文脈においてイメージが生じていない鑑賞経験が存在するかということは問題である。(Yeung [2021] Ch.3 参照) ここではこの問題に立ち入ることを控える。

<sup>9</sup> Carroll [1990] p.80 著者訳

「思考されたこと」の意味で用いられているのであり、このことには注意すべきである<sup>10</sup>。では、思考されたことにはどのような特徴があるのか。まず、思考されたことは内容と対象を持っている<sup>11</sup>。たとえば、「地球が平面である」という思考の内容は、括弧内の事柄、すなわち「地球が平面である」ということで、この思考の対象は「地球」である。（思考内容と思考対象の区別は、次の段落以降で重要な論点として出てくるので注意されたい。）次に、思考されたことの内容は記述可能なものであり、一般的には命題として表される<sup>12</sup>。「地球が平面である」という思考の内容は、「地球は平面である」という命題として表すことができる。以上が、「思考」及び「思考されたもの」が備える基本的な特徴である。

では、このように位置付けられた「思考 (thought)」がフィクションのパラドックスに対してどのように関わってくるのだろうか。この点に関するラマルクの主張を見てみよう。ラマルクは次のふたつの違いを強調する<sup>13</sup>。

- ① X を恐れる (be afraid of X)
- ② Y によって恐れる (be afraid by Y)

前者の X とはすなわち恐怖の対象である。ラマルクによれば、X を恐れる場合、X が存在する必要はない。なぜなら、現に私たちは幽霊やレプラコーンなどの非存在者を恐れているからだ。（ただし、ここには論点先取のおそれがある。この結論の妥当性は第3章で詳しく検討する。）一方、Y とはすなわち恐怖の原因である。ラマルクによれば、Y によって恐れる場合、Y は存在しなければならない。なぜなら、因果関係を構成するものはみな存在していなければならないからだ<sup>14</sup>。このように、情動に関わる二つのものを区別することができる。一つには、X のような、情動の志向的对象があり、もう一つには、Y の

---

<sup>10</sup> 思考説に対する多くの批判がこの点を見逃している。Walton [1990], Levinson [1998]

<sup>11</sup> クレインによれば、思考対象（志向的对象）は「君は何について考えているのか」という問いによって与えられる答えにあたり、その対象が提示される仕方がその思考（志向的状态）の内容にあたる。（Crane [2001], 邦訳 p.44）

<sup>12</sup> 思考内容の記述のされ方に関しては論者によって意見が分かれる。ラマルクは命題的記述のほかに叙述的記述（文ではない名辞的な記述）を認めているのに対し、キャロルは命題的記述しか認めない。本論文でこの問題に立ち入ることは控えるが、両者とも命題的記述を認めている点を考慮して、以降は命題的記述を念頭に論を進める。（Lamarque [1981], Carroll [1987]）

<sup>13</sup> Lamarque [1981] p.294

<sup>14</sup> この形而上学的前提は、非存在なるものが存在に作用することが不可能であるということをも主張しているという点では妥当であるように思われるし、本論文の思考説とごっこ説の対立構造においては重要な論点ではないので、この前提の正当性についての検討は省略する。

ような、情動をひきおこす原因がある。情動が生じる限り、後者は存在するが、前者が存在するとは限らない。

この区別に基づいて、フィクションに対する情動を説明することができる。ここで議論のために次のようなケースを想定しよう<sup>15</sup>。チャールズという人間が映画館でホラー映画を見ている。そして、緑色のスライムがこちらに襲ってくるように見える映像がスクリーン上に映されたとき、チャールズの心拍数は上昇し、筋肉は緊張する。ラマルクによれば、チャールズはこのとき真正の恐怖を経験している。チャールズの恐怖の志向的对象はスライムであり（つまり、チャールズはスライムを恐れている）、恐怖の原因はスライムについての思考内容（つまり、チャールズはスライムについて思考されたことによって恐れている）。先に示した思考対象と思考内容の区別<sup>16</sup>を用いると、次のように言うことができる。チャールズの恐怖の志向的对象はスライムという思考対象であり、恐怖の原因はスライムについての思考内容である。なお注意すべきことは、チャールズの恐怖が、スライムについての恐ろしい思考内容によって生じたものであって、単に思考するという行為によって生じたのではないということだ<sup>17</sup>。すなわち、チャールズが恐怖を感じるのは、単に思考したからなのではなく、そこで思考されたことが恐ろしいことだからなのである。

チャールズがスライムについての思考内容によって恐れているということから、思考説は次のことを主張する。すなわち、真正の情動が生じるためには対象の存在が信じられていなくともよい、このことである。先に確認したように、思考と信念は異なるものである。信念の場合、主体は信じられている内容の真理性にコミットするが、思考の場合、その主体は思考されている内容の真理性にコミットしないのだ。チャールズは恐ろしいスライムを思考しているが、この思考はスライムが真に存在すると信じることなしに抱かれている。チャールズの恐怖が、スライムの存在についての信念によってではなく、スライムについて単に思考された内容によって生じたのだとすれば、フィクションのパラドックスは解決される。すなわち、「ある対象に対して真正の情動を抱くためには、われわれはその対象が存在すると信じていなければならない」という（1.真正情動条件）の主張は誤りであり、正しくは「ある対象に対して真正の（genuine）情動を抱くためには、われわれはその対象が存在すると信じていなくともよい」<sup>18</sup>と主張されるべきなのである、と思考説

---

<sup>15</sup> この例はケンダル・ウォルトンが用いる例である。Walton [1990] 邦訳第5章・第2節、第7章・第1節等

<sup>16</sup> 前注11及びその本文箇所を参照せよ。

<sup>17</sup> Carroll [1990] p.80 前注10及びその本文箇所を参照せよ。

<sup>18</sup> フィクション経験に限っては、対象が思考されているということは必然であるように思

は主張する。（ここには論理的な欠陥がある。思考が情動の原因であるということは、信念の方が情動に必要かどうかということについては何も含意しないからである。この点が後のロビンソンの情動理論を持ち出す理由となる。詳しくは本論文第3章・第1節。）

思考説を支持すると直観的に思われる例を挙げよう。ある男性には妹がおり、その妹には6人の子どもがいる。あるとき男性が目に涙を浮かべながら次のように言う。「もし妹に子どもができなかったら、どんなに酷いことだっただろう」<sup>19</sup>。つまり、男性は、実際には子沢山である妹に子どもがひとりもできなかったら、ということ想像して悲しんでいるのである。この場合、男性は「妹が子どもを授からなかった」ということを信じてはいない。なぜなら、自分の妹に6人の子どもがいることを知っているからだ。しかし、彼は悲しみを感している。この悲しみはどこから生じたのか。それは、「妹が子どもを授からなかった」という思考内容に他ならない。

思考説論者のキャロルは、思考説を支持する別の証拠として以下のようなものを提示している<sup>20</sup>。それは、私たちがホラー映画を見ているときの反応の仕方に関わるものである。チャールズはホラー映画を見ているとき、あまりの怖さに目を背けたり、他のことを考えて気を紛らわそうとしたりする。キャロルによれば、スクリーンから目を背けるのは、恐ろしいスライムについて考えないためである。また、他のことを考えて気を紛らわすのは、同じく恐ろしいスライムについて考えないためである。つまり、ホラー映画を見ているときのチャールズの振る舞いは、私たちが感じる恐怖の原因が思考されたものであるということを示しているのである。少なくとも、以上のような現象に対して思考説は何らかの説明を与えることができるのだ。

以上が思考説の概略である。

---

われる。しかし、(真正情動条件) が情動一般についての規範であることを鑑みて、改訂後の文末を「対象を思考していなければならない」とはしないでおく。

<sup>19</sup> この具体例の元は以下。Radford [1975] p.74

<sup>20</sup> Carroll [1990] p.80

## 1.2 ごっこ説

「ごっこ説」と呼ばれる立場は、フィクションのパラドックスにおける立場のひとつではあるのだが、この理論が扱うのはフィクションのパラドックスに留まらない。ごっこ説はケンダル・ウォルトンによって提唱され、ウォルトンはこの理論をもって表象芸術 representational art とその鑑賞経験を包括的に説明しようと試みる。ごっこ説の本質は、表象芸術の鑑賞経験をごっこ遊びという観点から解釈することである。紙幅の都合上、ここでの詳しい解説を控えるが、ポイントは表象芸術の鑑賞経験がごっこ遊びと類比的であるということである<sup>21</sup>。すなわち、たとえば子どもたちが木の棒という「小道具 prop」を剣とみなすごっこ遊びを行うように、表象芸術作品の鑑賞者はその作品を「小道具」としたごっこ遊びを行っているとして解釈できるのである。これはどういうことか。たとえば、今リチャードは『グランド・ジャット島』を見て、二人連れが公園を散歩している様子を想像している。しかし、二人連れが公園を散歩しているということは、虚構的である。なぜなら、厳密には、リチャードの目の前に存在する物体は特定の絵の具の配列に過ぎないからである。このとき、リチャードは、特定の絵の具の配列を備えた『グランド・ジャット島』を「小道具」として、「二人連れが散歩している」とみなすごっこ遊びをしていると考えられるのである。

ここからはフィクションのパラドックスに関するごっこ説の主張を見るときしよう。ごっこ説によれば、真正の情動とは、行動の動機づけと信念を含むものである<sup>22</sup>。先のチャールズとスライムの例に戻ろう。これら2つはチャールズにおいて成立しているだろうか。まず、チャールズは鑑賞中に逃げたり助けを求めたりしていない。つまり、彼は恐怖に特有の行動を動機づけられていないのだ<sup>23</sup>。信念の方はどうか。ごっこ説に従えば、スライムが存在すること、延いてはスライムがチャールズの方へと向かってきているということ

---

<sup>21</sup> ウォルトンのごっこ説に関するより詳細で分かりやすい概説は森 [2010]や田村 [2013]を参照。

<sup>22</sup> Levinson [1998] ウォルトン自身は情動一般のレベルでの議論を行っていないため、本論文では、同じくごっこ説論者であるレヴィンソンが提示する情動一般のレベルでのごっこ説を対象とする。(後注 28, 55 参照) なお、これらの諸条件が挙げられる根拠は本論文第三章を参照。

<sup>23</sup> ここで恐怖が動機づける行動には「硬直する (freeze response)」というものがあるではないか、という反論が出てくるかもしれない。しかし、映画館の座席に座り続けるというチャールズの行動を、怖すぎて動けない状態にあると解釈することはチャールズ自身の現象学的事実と一致しないだろう。よって、硬直反応ですらチャールズにおいては動機づけられていないと見るべきである。

は現実世界では成り立たず、虚構において<sup>24</sup>のみ成り立つ。なぜなら、実際にはスライムはチャールズの方へと向かってきてはおらず、チャールズがそのように想像しているだけだからだ。ゆえに、スライムがチャールズにとって脅威であるということも同じく虚構においてのみ成り立つ。つまり、スライムの脅威は現実のものではなく、想像されたものに過ぎない。よって、スライムが脅威であるという信念もまた現実世界では成り立たず、虚構においてのみ成り立つ。チャールズはスライムが脅威であると実際に信じていないのだ。ここまでに確認したことに従えば、動機づけと信念は成立していない。真正の恐怖の必要条件がすべて揃っていないので、チャールズが経験しているものは真正の恐怖とはいえないのだ。

ところが、真正の恐怖でないにもかかわらず、チャールズは鑑賞後に「ああ怖かった」とつぶやくかもしれない。ごっこ説は、この事態を説明するために、チャールズが虚構において恐怖しているのだと見なす。ところで、恐怖に典型的な心理的・生理的反応である動悸や筋肉の緊張はチャールズにおいても生じており、ウォルトンは、情動における特に心理的・生理的反応のことを準情動 (quasi emotion) と呼ぶ。(チャールズの場合は準恐怖ということになる。) ごっこ説によれば、準恐怖は、スライムが脅威であると虚構において信じることによって生じたものである。準恐怖のみでは、虚構においてチャールズがスライムに対して恐怖を経験していることは成立しない。なぜなら、準恐怖は、怒りや驚きのような恐怖とは違うものにも共通するからだ。それに、チャールズがスライムを恐れているということも成立しない。チャールズが恐怖を経験していて、そしてその恐怖の対象がスライムであるということが虚構において成立するのは、チャールズが虚構においてスライムが脅威であると信じることによってである。チャールズが虚構においてスライムが脅威であると信じ、それによって準恐怖が生じたということを理由に、チャールズは虚構においてスライムを恐れているとみなせるのである。ごっこ説は、このように考える<sup>25</sup>。(虚構的な信念と準恐怖から恐怖の虚構性を導出するごっこ説の考えに疑問・反論の余地があるかもしれないが<sup>26</sup>、ごっこ説の主張として本論文の議論にとって重要なのは、フィクションに対する恐怖が虚構的なものとして解釈できるかにかかわらず、少なくとも真正の恐怖ではないという点である。)

---

<sup>24</sup> 「虚構において」とは「ごっこ遊びにおいて」と同じ意味である。

<sup>25</sup> Walton [1990], 5.2.

<sup>26</sup> この導出プロセスへの反論としては森[2010]などがある。

チャールズは虚構においてスライムを恐れているが、それは真正の恐怖ではない（実際には恐れていない）。このことは、次のことを意味する。つまり、ごっこ説によれば、フィクションのパラドックスにおける（3.反応条件）、すなわち「われわれはフィクションの中で描かれている対象に対して、真正の情動を抱く」という主張が誤りであり、われわれがフィクションに対して抱くのは真正の情動ではありえないということである。

ごっこ説は、フィクションに対する情動が真正の情動であるための条件を備えていないと主張するわけだが、その具体的な例として次のようなものを挙げている<sup>27</sup>。たとえば、過去のトラウマにより犬恐怖症になってしまったフランシスは、犬をできる限り避けようとする。また、飛行機に乗ることを恐れているアロンは、飛行機での移動を極力避けようとし、飛行機に乗っているときでも今すぐ降りたいという欲求に苛まれる。このように、真正の恐怖は何らかの行動を動機づける。しかし、ホラー映画を見ているチャーリーは違う。チャーリーは、映画館を出たり、警察に通報したりしようとする傾向を一切示さない。（そればかりか、好んでホラー映画を観さえするのだ。）このように、逃げたり助けを求めたりするといった恐怖に特有の行動を動機づけるような作用がホラー映画の鑑賞においては成り立っていないのだから、当然チャールズは自分が危険な状態にあるとは信じていないし、真正の恐怖を感じてはいないはずである。

以上が、ごっこ説の概略である<sup>28</sup>。

---

<sup>27</sup> Walton [1990], 5.2.

<sup>28</sup> ここで描写したごっこ説は、必ずしもウォルトンの主張と厳密に一致するわけではない。特に、ウォルトンは情動一般のレベルでは議論しておらず、本論文ではその趣旨に従ってごっこ説の主張を情動一般のレベルに書き換えた。（後注 55 参照）

## 2 論点の整理

ここまでで、思考説とごっこ説の両方を概観した。両者の主張が対立するものであるのは明らかである。なぜなら、思考説はパラドックスにおける(1.真正情動条件)を偽と見なし(3.反応条件)を真と見なすのに対して、ごっこ説は(1.真正情動条件)を真と見なし(3.反応条件)を偽と見なししているからである。では、この対立における問題点はどこにあるのだろうか。一部はすでに示唆されていることではあるが以下に整理しておこう。(先にも述べたが、ここでも恐怖という情動に限って議論しよう。)

第一の論点は、「真正の情動に信念は必要か」という点である<sup>29</sup>。この点に関して、思考説は次のように言う。真正の情動に信念は必要でない、と<sup>30</sup>。これに対して、ごっこ説は反論する。真正の情動に信念は必要である、と。はたして、恐怖の本性にとって信念は不可欠なものなのか。このことが問題であり、この問題の解決がフィクションのパラドックスにおける(1.真正情動条件)の真偽に関わる。

第一の論点が、ごっこ説の妥当性を検討することに主眼があったのに対して、第二の論点は、思考説の妥当性を検討するためのものである。すなわち、真正の情動に信念が不必要であるということだけでなく、「単に思考された内容によって真正の情動が生じうるか」というのが第二の論点である。この点に関して、思考説は次のように言う。真正の情動は思考された内容によっても生じうる、と。これに対して、ごっこ説は反論する。真正の情動は信念を欠いた思考内容によつては生じない、と。第二の論点も(1.真正情動条件)に関わる問題である。

第三・第四の論点はどちらもごっこ説の妥当性を検討するためのものである。第三の論点は、「真正の情動に行動の動機づけは必要か」という点である。たとえば、後にウォルトンは信念を欠いた情動の存在を認め、信念を真正の情動の条件から除外するのだが<sup>31</sup>、それでも依然として、行動への動機づけは真正の情動の条件であると主張する<sup>32</sup>。はたし

---

<sup>29</sup> ウォルトンに限っては、信念を伴わないような情動を認め、真正の情動には必ず信念が必要であるという主張への直接的なコミットメントを控えている。(Walton [1997], p.49 n.11) 信念を伴わない情動とは、たとえば恐怖症によって生じる恐怖である。クモ恐怖症の人間は、クモの単なる絵であっても、それを前に恐怖をおぼえる。この恐怖に、クモの脅威性や存在についての信念は欠けているはずである。

<sup>30</sup> 前注 18 参照。

<sup>31</sup> 前注 29 を参照せよ。

<sup>32</sup> Walton [1990], p.201-202

てこの主張は正しいのだろうか。これが第三の論点であり、この問題の解決は（3.反応条件）の真偽に関わる。

第三の論点に関して、第3章以降の展開を示しておこう。後に詳しく述べるが、情動の進化論的背景を鑑みれば、真正の情動に行動の動機づけ<sup>33</sup>は必要であると考えられる。この点でウォルトンの主張は妥当性を持つ。では、真正の情動には動機づけが必要であるとして、フィクション経験における情動には動機づけの機能が備わっていないのだから、フィクション経験での情動は真正のものではないと結論すべきなのだろうか。この点に関して後に見る感情評価説はウォルトンの主張に反対する。その詳細は第3章で述べるが、フィクションに対する情動にも動機づけの機能が備わっており、実際にはこの機能が抑制されたり、動機づけられる行為が変化させられたりしていると考えられるのである。ゆえに、第三の論点は「真正の情動に行動の動機づけは必要か」という点から、「フィクション経験における情動に行動の動機づけの機能は備わっているか」という第四の論点に移行する。

論点をまとめよう。第一の論点は「真正の情動に信念は必要か」ということであり、思考説は「必要ではない」と答えることで、ごっこ説を否定する。（第一の論点は思考説の主張と表裏一体なので、これは同時に思考説の擁護でもある。）第二の論点は、「単に思考された内容が情動の原因になりうるか」ということであり、思考説は「なりうる」と答える。（第二の論点も同じく、思考説の擁護であり、ごっこ説の否定でもある。）第三の論点は、「真正の情動に行動の動機づけは必要か」ということであり、ごっこ説は「必要である」と答える。第四の論点は、「フィクション経験における情動に行動の動機づけの機能は備わっていないか」ということであり、思考説は「備わっている」と答えることで、ごっこ説を否定する。

第一と第二の論点についての議論のみでフィクションのパラドックスは解決されうる。なぜなら、パラドックスは少なくともひとつの条件が否定されれば解決可能なのであって、第一と第二の論点についての本論文の結論は（1.真正情動条件）を否定するものだからである。ゆえにパラドックスの解決だけを問題とするならば、第三と第四の論点を論じる必要はないのだが、思考説とごっこ説の対立という構造で本論文の議論が成り立ってい

---

<sup>33</sup> ここで言う「動機づけ motivation」は行動を引き起こす傾向性のことであって、必ず何かしらの行為が現実表れていなければならないということでない。

る点、それから第三と第四の論点について検討することで私たちの知見が開かれるという点を考慮して、これらの論点についても検討することとする。

これら四つの論点にしたがって、思考説は自説を正当に根拠づけ、延いてはパラドックスを解決することに成功していると言えるだろうか。残念ながら、そうは言えない。思考説にはどのような問題があり、その問題はいかにして解決されうるのだろうか。次章では、その点について述べよう。

以下にパラドックスの概要と論点をまとめたので適宜活用されたい。

### フィクションのパラドックス

(1.真正情動条件) : ある対象に対して真正の (genuine) 情動を抱くためには、われわれはその対象が存在する<sup>1</sup>と信じていなければならない。

(2.不信条件) : われわれはフィクションの中で描かれている対象が存在するとは信じていない。

(3.反応条件) : われわれはフィクションの中で描かれている対象に対して、真正の情動を抱く。

### 四つの論点

第一の論点 : 真正の情動に信念は必要であるか。

第二の論点 : 単に思考された内容が情動の原因になりうるか。

第三の論点 : 真正の情動に行動の動機づけは必要であるか。

第四の論点 : フィクションに対する情動には行動の動機づけが備わっていないか。

## 3 思考説の穴を埋める

### 3.1 思考説の問題点

第一の論点に関して思考説は、真正の情動に信念は必要ないと主張する。しかし、このことの根拠を思考説は示せていない。思考説の最も根本の主張は、情動の原因が思考内容でありうるということであるが、この主張自体は情動には信念が必要ないということを導かない。なぜなら、思考と信念は排他的な関係にはなく、思考内容が情動の原因でありながらそこには情動の条件として信念が含まれている可能性が存在するからである。情動の原因と情動の因果的な必要条件は同一概念ではない<sup>34</sup>。そして、フィクションのパラドックスにおける（1.真正情動条件）はまさに、信念の必要性を主張するテーゼであるのだから、パラドックスの解決を目指す限り、思考説は、思考内容が情動の原因たりうることを主張するだけでなく、信念の不必要さも根拠づけなければならないのだ。ところが、思考説は第一の論点に関して正当な根拠を示せていないのである。

さらに、第三の論点に関しても、思考説は説得的な説明を与えることに失敗しているように思われる。先に示したように<sup>35</sup>、思考説は、ホラー映画の鑑賞者が目を背けたり他のことを考えたりするという事態が、情動の動機づけの結果であると考えられる。しかし、真正の情動に動機づけの力が備わっていないなければならないということの根拠を思考説は示していない<sup>36</sup>。

以上のように思考説の主張に根拠が欠けているということは、思考説のみではパラドックスが解決されないということであり、当然、ごっこ説を退けることもできないということである。そこで、ロビンソンの感情評価説の出番である。思考説だけでは第一・第三の論点に関して根拠を以て主張することができないのであるが、感情評価説はこの問題をクリアできる。それだけではない。感情評価説は、第二・第四の論点をも含む統一的な説明

---

<sup>34</sup> たとえば砂糖が水に溶けるという出来事の原因は砂糖を水に溶かすという行為であり、一方で因果的な必要条件は砂糖の水溶性である。

<sup>35</sup> 本論文 p.9

<sup>36</sup> この点はごっこ説にもあてはまる。思考説もごっこ説も、情動の動機づけの側面を重視する点では共通しているのだが、どちらも直観以上の根拠を示せていないように思われる。

をパラドックスに与え、ごっこ説を退けうるのである。それでは早速、感情評価説の主張を確認することにしよう。

### 3.2 情動理論の諸説概観

初めに「情動とは何か」という問題について提案されてきた伝統的な立場をひと通り観ておこう<sup>37</sup>。まずは感覚主義的なアプローチである<sup>38</sup>。感覚主義によれば情動とは単なる感じそのものである。たとえば、私たちは怒っているときに、頭に血が上る“感じ”を経験するが、怒りとはまさにその感じそのものである、というわけだ。情動には特定の感じが伴うということは経験的にも正しそうである<sup>39</sup>。それならば、情動とはただの感じでしかないのだろうか。情動が単なる感じでしかないとすれば、痛みの感じや空腹感と情動は同じ種類のものということになる。しかし、そうではない。感覚主義が取り逃している点は、情動の評価性である。情動とは何らかの評価なのである。この点を強調したのが次の認知主義・判断主義である。

認知主義的・判断主義的なアプローチをとる人たち<sup>40</sup>は、情動とは世界についての単なる認知的な評価であると主張する。たとえば、怒りは「侵害」が認知されたことによって生じる負の評価であるとされる。しかし、認知主義にも問題がある。それは、情動を伴わない（情動とは見なされない）判断・評価が確かに存在するということだ。たとえば、よく訓練された犬について「犬の歯は尖っていて危険である」と認知的に評価しながらも、恐怖を感じないということは可能である。一方で、噛まれる恐れが無いということを知覚的に十分に理解していながらも、どうしても恐怖を感じて犬に近づくのをためらうということもありうる。つまり、認知的な判断・評価と情動は異なるものなのだ。では、それらの単なる判断や評価の他に、情動に欠かせないものは何だろうか。それは行動の表出または動機づけである。

---

<sup>37</sup> 分類は **Robinson [2005]** に従う。

<sup>38</sup> 主な論者は、ウィリアム・ジェイムズ。

<sup>39</sup> 特定の感じが常に伴っているわけではないような情動はありうる。たとえば、過去の出来事が原因で特定のある人に対して継続的に怒っている場合。この場合、その間ずっと特定の感じが生じているわけではない。ゆえに、情動と感じは時間的に同一ではない。それでも、継続的な怒りの初期には特定の感じが伴っていたはずであり、感じが情動にとって重要な要素であることは変わらない。

<sup>40</sup> 主な論者は、ロバート・ゴードン、ロバート・ソロモン、マーサ・ヌスバウム、ピーター・ゴールディー。

行動主義的なアプローチ<sup>41</sup>は、情動とは特定の行動を表出または動機づける心的状態であると考える。たとえば、「攻撃」という行動を動機づける心的状態が怒りであるとされる。前段落の犬の例で言えば、恐怖は犬を「回避する」という行動を動機づける。しかし、行動主義も情動についての十全な定義に失敗している。なぜなら、異なる情動が同じ行動を動機づけたり、情動とは見なされないにもかかわらず情動と同じように行動を動機づけるものが存在したりするからだ。たとえば、怒りとは区別される恐怖という情動によって「攻撃」が動機づけられる場合があるし、(不適切な例ではあるが) 子どもへの教育として「攻撃」という行為が動機づけられる場合もある。つまり、情動を単なる行動の表出や動機づけと同一視することはできないのだ。

最後に、これまでに見たすべての立場において看過されてきた要素がある。それは生理学的な要素である。生理学的なアプローチ<sup>42</sup>は、情動を生理学的なパターンに還元しようとする。たとえば、このアプローチによれば、怒りとは、発汗や血中のストレスホルモンの増加や血圧の上昇や皮膚伝導率の上昇等のパターンと同一視される<sup>43</sup>。各情動にはそれぞれ特有の生理学的なパターンが存在し、それらのパターンが主体の内で生じているかによって情動が生じているかが決まり、どのパターンが生じているかによって情動の種類が決定するというわけである。しかし、このアプローチは多くの壁に突き当たっているのが現状である。というのも、同じ情動であっても時と場合によって生理学的なパターンが異なるということが実験的に示されており、すべての情動を特定できるような生理学的なパターンのリストは現時点で見つかっていないのだ<sup>44</sup>。ゆえに、生理学的なパターンのみで情動を定義することはできない。

「情動とは何か」という問題に対して歴史的に提出されてきた様々な立場は、大まかに以上のように分類される。

### 3.3 感情評価説<sup>45</sup>

前節で諸情動理論の大枠を示した。ジェネファー・ロビンソンはこれらの不完全な理論を総合する。彼女によれば、情動とは、外的または内的な環境における自身の利害関心に

---

<sup>41</sup> 主な論者は、B・F・スキナー、J・B・ワトソン。

<sup>42</sup> 主な論者は、ウィリアム・ジェイムズ、カール・ランゲ。

<sup>43</sup> Robinson [2005], p.49

<sup>44</sup> Robinson [2005], p.32

<sup>45</sup> Affect を感情と訳し、Emotion を情動と訳すのは近年の通例に従った。情動の哲学においては一般的に、Affect が Emotion・Mood・Sentiment などを包括する上位のカテゴリーであると考えられている。

関わる事柄についての感情的な評価 (affective appraisal) <sup>46</sup>とそれに続く認知的なモニタリング (cognitive monitoring) の連続的なプロセス (process) である。この意味を順に確認しよう。まず内的な環境とは心的なもののことであり、外的な環境とは主体を取り巻く物理的なもののことである。たとえば、前者は思考や信念であり、後者は人や動物やモノである。私たちは、これらの内的または外的環境の内にある主体の関心や幸福や目標と関わるような事柄を感知する機能を備えており、この感知は感情的評価という仕方で為される。感情的評価は身体的評価や非認知的評価とも呼ばれ、感情的評価という言葉で意味されている重要な点は、ずばりこの評価の非認知性である。私たち人間にはある種自動化された、つまり非認知的な仕方で世界について評価する能力が備わっているのだ。たとえば、あなたに暴言を言い放つ他人に対しては自然と怒りが生じ、目の前の蛇に対しては否が応でも恐怖を抱く。これらの情動の背後にある非認知的な評価 (怒りの場合には「侵害」であり、恐怖の場合には「脅威」である<sup>47</sup>) があなたの内に生理学的な反応や行動の動機づけを生じさせる。ところで、あなたに向けられた暴言は単なる聞き間違いであったということが分かるかもしれない。蛇に見えたものが本当はただのロープであると判明するかもしれない。その場合、認知的なモニタリングが感情的評価を修正し、怒りや恐怖は静められる。それに伴ってあなたの行動も修正される。

また、これらのプロセスはひとつのものとして切り取れるような完結したものではなく、むしろ連続的なものである。感情評価説によれば、感情的評価に始まる情動のプロセスはフィードバック機能を備えている。暴言を言い放ってきた他人に対して怒号を浴びせるうちに余計に腹立たしくなってくるかもしれないし、逆に怒りが収まってくるということもあるだろう。このように、最初の感情的評価によって引き起こされた反応が情動自体を調整するようなフィードバック機能を備えた連続的なプロセスこそが情動なのである。

48

---

<sup>46</sup> ここでロビンソンはラザルスの中心的関係テーマ (core-relational theme) を念頭に置いている。中心的関係テーマとは、いくつかの情動は主体と環境の関係を表しているという考えである。たとえば、怒りは「自分や自分のものへの侮辱的な侵害」を、悲しみは「取り返しのつかない喪失の経験」を表しているとされる。(Lazarus [1991], p.122) しかし、ラザルスは認知的な評価を意図している点でロビンソンと異なる。(Robinson [2005], p.68)

<sup>47</sup> Robinson [2005], p.68

<sup>48</sup> 以上の感情評価説の主張は専ら経験的・実験的な証拠によって支えられている。Robinson [2005], 1~3.

### 3.4 感情評価説によるパラドックスの解決

感情評価説をフィクションのパラドックスの文脈に位置付ければ次のようになる。まずは、第一の論点、すなわち「真正の情動に信念は必要か」ということから検討しよう。感情評価説によれば、真正の情動とは外的または内的な環境に対する非認知的な評価に始まる連続的なプロセスであった。「非認知的な評価に始まる」ということは、その評価自体には認知的な作用が必要とされていないということである。そして、信じるということは認知的な作用に含まれるのだから、評価というプロセスにとって信念は必要条件ではないのである。感情評価説が主張するのは、感情的評価の非認知性から信念の不必要性が帰結するということである。よって、感情評価説は、真正の情動はその対象の存在が信じられていなくともよいと主張し、この主張は思考説と一致し、ごっこ説に反対する。

第二の論点、すなわち「単に思考された内容が情動の原因になりうるか」という点に移ろう。思考も信念も情動の原因にはなりうる。なぜなら、感情的評価は非認知的なものであり、この評価作用単独では、評価の原因（すなわち評価の対象）が思考されたものであるか信じられたものであるかを区別しないからである。感情的評価は、その対象が真に成り立っているかどうかについての主体の態度に関わらず、自動的に生じるものなのだ。感情評価説にしたがえば、真正の情動は思考されたものによっても生じうるのであり、第二の論点に関しても思考説と一致し、ごっこ説に反対する。

第一と第二の論点のみで、すでにフィクションのパラドックスは解決可能である<sup>49</sup>。パラドックスの3つの条件の内（1.真正情動条件）を棄却することで、全体の論理的不整合は解消される。改訂後のパラドックスの定式は以下のようになるだろう。

（1\*.真正情動緩和条件）：ある対象に対して真正の（genuine）情動を抱くためには、われわれはその対象が存在すると信じていなくともよい。

（2.不信条件）：われわれはフィクションの中で描かれている対象が存在するとは信じていない。

---

<sup>49</sup> 第一と第二の論点に関しては、次のような具体例を以て解消する道もあるかもしれない。つまり、過去や未来を志向する情動（たとえば、郷愁・後悔・期待・希望）の例に訴える方法である。というのも、過去・未来志向の情動は対象の存在についての信念を本質的に欠いているように思われるからである。現にこの路線でパラドックスを解決しようとする論者はいるが（たとえば Moran [1994]）、本当にそれらの情動が対象の存在についての信念をどんな仕方であれ含んでいないのかは疑問の余地がある。

(3.反応条件) : われわれはフィクションの中で描かれている対象に対して、真正の情動を抱く。

第一と第二の論点についての検討から言えることは、思考説も感情評価説も(1.真正情動条件)を否定してパラドックスを解決するという点で共通するという点である。そしてこの共通点は偶然ではない。感情評価説からは思考説が帰結するのである。なぜなら「真正の情動は信念を必要とせず思考によっても生じうる」という思考説の主張は、「認知は、真正の情動に必要な感情的評価にとって必要条件ではないが、評価の原因(対象)にはなりうる」という感情評価説の主張を言い換えただけのものだからである。ここに、問題を抱えた思考説が進むべき道がある。つまり、思考説は、主張の根拠薄弱という問題を感情評価説のような情動理論に頼ることによってクリアしうるのである。

ひとまず、フィクションのパラドックスは解決することができた。ここからは、(3.反応条件)の是非についての議論になる。つまり、(1.真正情動条件)だけを否定してパラドックスを解決する道と、それに加えて(3.反応条件)までも退けて解決する道のふたつがあり、どちらが正しいのかという問題である。第三の論点、すなわち「真正の情動に行動の動機づけは必要か」という点を検討しよう。第三の論点に関して、ごっこ説は「真正の情動は行動を動機づける」と主張する。感情評価説は、この点に関しては、ごっこ説に同意する。ロビンソン自身はその根拠をはっきり述べていないが、おそらくそれは私が先に述べた進化論的な観方にあると思われる。ロビンソンは感情的評価についてつぎのように述べている。

これらの非認知的な感情的評価は非常に素早く自動的に生じ、生物やその生物が属する集団の生命や幸福にとって重要なものとして登録された環境内の出来事に注意を向けさせ、すぐさま取り組ませるように作られているように思われる。<sup>50</sup>

情動とは生物がより素早く周囲の環境を評価することで生存率が上がるゆえに手に入った機能であると考えられるのだ。たとえば、恐怖や怒りは心拍数を上昇させることで、逃げたり戦ったりするための身体的状態を準備する<sup>51</sup>。周囲の環境の評価にその都度認知的な評価が必要であるとすれば、時間がかかってしまい、生物の生存率は大きく下がるだろ

---

<sup>50</sup> Robinson [2005], 著者訳 p.58 他には p.42

<sup>51</sup> Robinson [2005], p.29-32, 59

う。生物の生存や幸福にとって重要な情報は緊急性が高いものである。ゆえに、感情評価説に則って情動を理解すれば、周囲の環境を非認知的に素早く評価するというところに情動が適応的に寄与していると考えられるもっともな理由がある。感情評価説（または進化論）にしたがえば、真正の情動は行動を動機づける<sup>52</sup>。よって、第三の論点に関しては、感情評価説とごっこ説の主張は一致する。

では、第四の論点、すなわち「フィクション経験における情動に行動の動機づけの機能は備わっていないか」という点はどうであろうか。第四の論点に関して、ごっこ説は「フィクション鑑賞における情動は行動を動機づけない」と主張する。つまり、真正の情動は行動を動機づけるが、フィクションに対する情動は行動を動機づけないので、後者は真正のものではないということである。たしかに、ごっこ説が言うように、ホラー映画を見ているチャールズは逃げたり助けを求めたり、恐怖に典型的な行動をしないし、そうしようとする傾向すらもっていない<sup>53</sup>。しかし一方で、チャールズのどんな行動も動機づけられていないわけではない。思考説が言うように、スクリーンから目を背けたり、別のことを考えて気を紛らわせようとしたりするよう動機づけられているのだ<sup>54</sup>。思考説のこの例をごっこ説ではうまく説明することができない。ホラー映画鑑賞というごっこ遊びの中に「スクリーンから目を背けよ」とか「ほかのことを考えよ」といった一般的なルールは存在しないし、チャールズが独自にそのようなルールを設けてごっこ遊びをしているわけでもない。むしろ、目を背けたり別のことを考えたりすることは、ごっこ遊びからの離反を示している。チャールズは本当に恐怖を感じていて不快であるから、ごっこ遊びへの参加を中止したのである。

このようにごっこ説ではチャールズの振る舞いを説明することに困難があるように思われるが、感情評価説では次のような説明を与えることができる。キーワードは「認知的モニタリング」である。認知的モニタリングとは情動のプロセスにおいて感情的評価のあとに続くものであり、これは主体がどのような行動をとるかに影響を及ぼすものであった。感情評価説によれば、スライムが近づいてくる映像が流れたとき、チャールズはそれを「脅威」として感情的に評価し、彼の内では真正の恐怖として見なされるべき一連のプロ

---

<sup>52</sup> 動機づけの力の強さは情動によって異なるだろう。一見、動機づけの機能が無いように見える情動があるかもしれない。しかし、恐怖や怒りなどの原始情動ほどわかりやすく行動に影響を及ぼすことはないような情動があるとしても、主体の行動に対してまったく何の影響も持たないような情動はありえないように思われる。やはり、適応的な観点から見れば、どんな情動も何かしらの行動を動機づけるはずである。

<sup>53</sup> 本論文 p.12 参照

<sup>54</sup> 本論文 p.9 参照

セスが展開する。しかし、そこで間髪入れずして認知的モニタリングが介入し、「これはフィクションである」という認知によって逃げたり助けを求めたりさせるような動機づけが修正される。その一方でスクリーンから目を背けたり他のことを考えたりするのもまた、「フィクション性の認識」という認知的モニタリングによって生じた動機づけである。感情評価説ならば、チャールズの振る舞いを上のように説明することが可能だ<sup>55</sup>。そして、この説にしたがえば、フィクション鑑賞における情動は行動を動機づけるのである。よって、第四の論点に関しては、感情評価説はごっこ説の主張に反対する。つまり、感情評価説は、パラドックスの(3.反応条件)をも否定してパラドックスを解決するという道は採らない。なぜなら、第三と第四の論点の両方で主張を成立させることで(3.反応条件)を退けることがごっこ説の目論見だったからである<sup>56</sup>。

---

<sup>55</sup> チャールズの振る舞いを説明できるということの他にもうひとつ、ごっこ説に対して感情評価説が優れている点がある。それはウォルトンの言う「準情動」に関わる。ウォルトンは、フィクションに対する情動を虚構的に解釈するにあたって準情動の生起を条件とするのであるが(本論文 p.11)、どのような理屈で鑑賞者の内に準情動が生じるのかという問題について今のところ説明を与えられていない。一方で感情評価説を採れば、鑑賞者には真正の情動が帰属されるので、準情動の生起システムは情動のシステムのなかで説明されうるだろう。

<sup>56</sup> なお、特にウォルトンに関しては、恐怖・憐れみ・感嘆などの個別的な情動のレベルで議論をしている(前注 22, 28 参照)。ゆえに、ウォルトンの主張は厳密には、「チャールズは真正の恐怖を経験していない」といったものであり、ここには恐怖とは別の真正の情動が生じている余地が認められている Walton [1997], p.38。つまり、フィクションに対して真正の情動は生じうるのだが、それらは恐怖や憐れみや感嘆といった日常的な情動(非ごっこ遊び的な情動)とは別のものである、ということがウォルトンの主張である。

しかし、チャールズが経験する情動を恐怖と同一のものだと見なす理由はある。第一にチャールズが「怖かった」という言語的報告を行い、恐怖と非常に似通った心理的・生理的反応が生じているということ。第二に、感情評価説に従えばチャールズに真正の恐怖を帰属させることに何の問題も生じないこと。ウォルトンは「チャールズの恐怖を現実のものとする動機はない」(Walton [1990], p.249)と主張したが、真実は逆である。チャールズに真正の恐怖を帰属させる以上ふたつの理由があるのであり、そうしない理由はないのである。

## 結論

ここまでの議論をまとめよう。思考説は（1.真正情動条件）を否定することで、ごっこ説は（3.反応条件）を否定することでパラドックスの解決を試みる。両者の議論は四つの論点に集約することができるのだが、思考説それ自体はいくつかの論点に関して根拠を示せていない。そこで思考説に根拠を与えうる理論として感情評価説を参照し、この説がどのようにしてパラドックスを解決するのかをみた。第一の論点（「真正の情動に信念は必要か」）と第二の論点（「単に思考された内容によって真正の情動が生じうるか」）については、「真正の情動は信念を必要とせず、思考されたものによっても生じうる」として思考説の主張が感情評価説の主張と一致した。つまり、感情評価説は思考説と同じく（1.真正情動条件）を否定することでパラドックスを解決する。つぎに、（3.反応条件）の妥当性に関する議論として第三と第四の論点が挙げられた。第三の論点（「真正の情動に行動の動機づけは必要か」）については、「真正の情動に動機づけは必要である」としてごっこ説の主張が感情評価説の主張と一致したが、第四の論点（「フィクション経験における情動に行動の動機づけの機能は備わっていないか」）については、「フィクション経験における情動に行動の動機づけの機能は備わっている」として感情評価説はごっこ説に対立する<sup>57</sup>。つまり、感情評価説は思考説と同じく（3.反応条件）は否定せずにパラドックスを解決する。結果として、フィクションのパラドックスを（1.真正情動条件）のみを否定することで解決するという方針や、その否定の仕方において思考説の主張は感情評価説の主張と一致する。

本論文の議論は、ロビンソンの感情評価説であれば、思考説と主張を一にしながらも、思考説がもつ問題をクリアできるということを示すことにあった。ゆえに感情評価説自体の妥当性は別に問題とされねばならないことである。いずれにせよ、フィクションのパラドックスを解く鍵が「情動とは何か」という問題にあることは間違いない。奇しくも、パラドックスに関するこれまでの議論の多くが情動の本性に対する正当な注意を欠いていた

---

<sup>57</sup> ごっこ説の誤りはあくまでフィクションのパラドックスという問題に限ってのことである。さらには、フィクションに対する情動をごっこ遊びの一部として解釈しようとする考え方自体が誤りであるというわけでもない。すなわち、フィクションに対する情動がごっこの的なものでしかない<sup>57</sup>と主張する点でごっこ説は誤りなのであって、真正の情動でありながらごっこの的なものでもあると主張する分には問題はない。したがって逆に、思考説の側が「フィクションに対する情動はごっこの的なものではありえず真正のものでしかない」という強い主張を行うならば、パラドックスを飛び越えてごっこ説全体を反駁する必要が生じる。本論文の主張はこの強い主張には与しない。

のであり、このことを反省することでフィクションのパラドックスについての議論はより有意義なものになるはずであろう。

最後に、本論文の議論が今後どのように展開されうるかを示しておこう。まず、本論文ではチャールズとスライムの具体例を用いたが、この例のみではすべての芸術作品において真正の情動が成立していることを示すことはできない。そればかりか、一般に「ホラー映画」と呼ばれるジャンル群においてさえ常に真正の恐怖が成立しているかも確実ではない。たとえば、単なる音や場面転換によっても人は驚くが、驚きは恐怖とは異なるものだろう。しかし、実際のホラー映画において驚き以上のものを観客に生じさせることに成功している作品はどれほど存在するだろうか。したがって、各作品が鑑賞者の内に真正の情動を生じさせることに成功しているかを検討することが問題となる。（これは哲学の仕事ではないかもしれない。）

さらに興味深いと思われる問題は、負の情動のパラドックスとのつながりである。負の情動のパラドックスとは、芸術作品によって負の情動が生じるにもかかわらず、そのような作品を人がときに好んで鑑賞するのはなぜかという問題である。たとえば、このパラドックスに対して本当は負の情動が生じていないとする立場があるのだが、もしも本論文で見たようにホラー映画に対しては真正の恐怖が生じうると主張するならば、この主張は先の立場とぶつかるように思われる。

他には美的情動の問題がある。美学においては、美や崇高が情動と見なされることがあるが、もしそれらが真正の情動であるならばそれらは一体どのような評価を内に備えているのだろうか。仮にそれらが真正の情動であるとして、（感情評価説にしたがえば評価とは適応的な意義をもったものであったのだが）美的情動はいかなる意味で適応的であるのだろうか。

本論文が扱ったフィクションのパラドックとは別にフィクション（延いては芸術一般）と情動に関わる複数の問題が存在する。上に挙げたものはほんの一部に過ぎない。それらの諸問題は相互に関連しているはずであり、それゆえにフィクションのパラドックスに対する応答も他の問題に対して答えを与えうるものでなければならない。芸術と情動の関係を統一的に説明するような究極の理論が最終的な目的として私たちを待ち構えている。

## 文献表

- 田村均(2013)「虚構世界における感情と行為 --ケンダル・ウォルトンの虚構と感情の理論—」. 『名古屋大学哲学論集』11、1-34
- 森功次(2010)「ケンダル・ウォルトンのフィクション論における情動の問題——Walton, Fiction, Emotion」. 『美学芸術学研究』29号、43-83
- Carroll, Noel (1990). “*The Philosophy of Horror: Or, Paradoxes of the Heart.*” Routledge.
- Crane, Tim (2001). “*Elements of Mind: An Introduction to the Philosophy of Mind.*” Oxford University Press. (植原亮訳『心の哲学—心を形づくるもの』勁草書房、2010)
- Lamarque, Peter (1981). “How can we fear and pity fictions?” *British Journal of Aesthetics* 21 (4):291-304.
- Lazarus, R. S. (1991). “*Emotion and adaptation.*” Oxford University Press.
- Levinson, Jerrold (1998). “Emotion in Response to Art: A Survey of the Terrain”. In M. Hjort and S. Laver (eds.). “*Emotion and the Arts.*” Oxford University Press.
- Moran, Richard (1994). “The expression of feeling in imagination.” *Philosophical Review* 103 (1):75-106.
- Prinz, Jesse J. (2004). “*Gut Reactions: A Perceptual Theory of the Emotions.*” Oxford University Press. (源河亨訳『はらわたが煮えくりかえる』勁草書房、2016)
- Radford, Colin & Weston, Michael (1975). “How Can We Be Moved by the Fate of Anna Karenina?” *Aristotelian Society Supplementary* 49 (1): 67-93.
- Robinson, Jenefer (2005). *Deeper Than Reason: Emotion and its Role in Literature, Music, and Art.* Clarendon Press.
- Walton, Kendall L. (1978). “Fearing fictions.” *Journal of Philosophy* 75 (1):5-27. (西村清和編・監訳『分析美学基本論文集』勁草書房、2018 所収)
- (1990). *Mimesis as Make-Believe: On the Foundations of the Representational Arts.* Harvard University Press. (田村均訳『フィクションとは何か』名古屋大学出版会、2016)
- (1997). “Spelunking, Simulation, and Slime: On Being Moved by Fiction.” In M. Hjort and S. Laver (eds.). *Emotion and the Arts.* Oxford University Press.
- Yeung, Lorraine K. C. (2021). “Why literary devices matter.” *Polish Journal of Aesthetics* 60 (1):19-37.